

松村通信第 1 3 5 号

2023 年 2 月 24 日

松村勝弘

ガーゲン・関係主義

近代的人間観の超克 またまた乱読中である。前号末尾で方法論的關係主義について考えたいと言った。これと関わって、ケネス・J・ガーゲン著、鮫島輝美・東村知子訳『関係からはじまる 社会構成主義がひらく人間観』（ナカニシヤ出版、2020 年、以下ではガーゲン[2020]と略す）などに依拠しながら関係主義について考えて見たい。

とはいえ方法論的關係主義について書いたまとまった本はみあたらない。論文の数も少ない。英文論文がいくつかあるくらいだ。ガーゲンにはまたケネス・J・ガーゲン著、東村知子訳『あなたへの社会構成主義』（ナカニシヤ出版、2004 年、以下ではガーゲン[2004]と略す）という著書もあるので、彼は社会構成主義者として知られている。social constructionism はまた、社会構築主義と訳されることもある。彼は社会心理学者であり、ペンシルバニア州ワースモア大学の名誉教授でもある。

社会学や心理学は私の専門外の領域ではあるが興味深い指摘がされている。近代的人間観を乗り越えようとされている。だがわかりにくい言葉もある。そこで 2020 年の邦訳の「訳者あとがき」から紹介しておきたい。すなわち「本書の核心は、近代の人間観『bounded being』を新しい人間観『relational being』をもって乗り越え、人々のウェルビーイング、つまりよりよく生きることを支えるための、新たな思想の地平をひらくことにあります。しかしながら、翻訳にあたり私たちがもっとも頭を悩ませたのは、この『bounded being』『relational being』『multi-being』という本書の心臓部とも言える言葉をどう訳すかということでした。これらの言葉がもつ動的で複層的な感覚をどうすれば読者に伝えられるのか、悩みに悩んだ末、『境界画定的存在』『関係規定的存在』『変幻自在的存在』という、日本語としては耳慣れない硬い言葉ですが、一見してそれだとわかるような訳語

をあてることにしました。」（ガーゲン[2020]488 頁）とにかくガーゲンに依拠しながら考えを進めたい。

社会構成主義・構築主義 本論に入る前に、社会構成主義・構築主義が何を言おうとするものかを考えておきたい。「構築主義はこれまでのところ、圧倒的に、社会科学や行動科学を支える認識論、いわばものの見方の問題であった。『物事が、人びとの主観的な意識のありようとは独立に実在する』というものの見方を客観主義、『物事には、容易には変化しがたい普遍的な本質がある』というものの見方を本質主義と呼ぶことにすれば、構築主義は、これらのものの見方に異議を唱え、別のものの見方を提示してきた。すなわち『普遍』や『本質』や『実在』とされている物事が、人びとの認識や活動によって、社会的・文化的・歴史的に『構築』されたものであること、したがって可変的であることを、構築主義は強調してきたのである。」¹⁾なるほど。ガーゲンもこう言っている。「『社会の基本的な単位は個人である』という考えによって、『共同』ではなく個々の人間の独立が強調されるようになりました。能力を評価されたり、善悪を判断されたり、心理特性を測定されたり、心の病を癒やされたり、犯した罪によって投獄されたりするのは、あくまで個人です。こうして、関係——知識、理性、道徳などを作り出すために必要な人々の調和——にはほとんど注意が向けられなくなりました。例えば、私たちは、個々の生徒について評価を行います。ある教育プロセスを達成するために、生徒と教師の間にどのような協力関係が必要かということはほとんど考えません。また、個人の権利は強調しますが、共同体を維持していくために何をしなければならないのかということにほとんど関心がありません。

このような個人主義的な考え方は、国家のレベルでも同様にみられます。……個々の単位にのみ注意を払うことは、関係を無視することになるのです。」（ガーゲン[2004]28 頁）

啓蒙思想・個人主義批判 合理的経済人として人間を捉える経済学。それは啓蒙思想・個人主義に基礎を置いている。果たしてそうか。経営学では生々しい人間・人間関係を対象に理論を構築しなければならないので、それでは成り立たない。関係主義は魅力的である。

ガーゲンに戻ろう。ガーゲンいわく。「それまで人間であることの中心的な構成要素は霊魂だったが、この時代[近代]に個人の理性がそれにとって代わることになった。私たちはそれぞれ理性の力をもっているのだから、宗教をはじめとするいかなる権威に対しても、何が本当であり、何が合理的であり、何が善いことであるかを宣言し、挑むことができる、ということが主張された(今もなお主張されている)。以来、民主主義、公教育、司法手続きなどの制度を正当化するために、この啓蒙思想は使われてきた。……[人間を]境界画定的存在[bounded being と位置付ける]というこのありふれた見方と、それが具現化された個人主義的な生のあり方は、私たちが共同で作りにしてきたものなのだ。それには限界があり、抑圧的で危険なものであるなら、代わりとなる見方を作り出すこともできるだろう。」(ガーゲン[2020]2-3 頁、以下すべて引用頁数は本書からのものである)ガーゲンはだから関係主義を主張する。

個人が社会から孤立して存在できるはずもない。確かに個人と社会の関係は複雑ではある。ガーゲンのいう境界画定的存在とは人間は生まれながらに自律した個人だと考える個人主義を指していると考えべきだろうし、これに疑問を呈しているのである。だからこのように言っている。「私の関心は、境界画定的存在のイデオロギーが、自己の市場価値と道徳的配慮の衰弱をいかに推し進めているか、という点にある。」(42 頁)そこでは「私たちは、相手が最小のコストで最大の満足を与えてくれるとき、その人を愛する。こうした見方を受け入れるならば、あらゆる関係は商品化されうるということになるだろう。」(43 頁)すると、「バリー・シュワルツが述べているように、経済学という学問は、『他のすべてのものを排除して経済的な利己心を追求するのに役立つ』。関係においても経済学的な計算が蔓延すれば、私たちは、対人関係が生活や人生にとってあまり意味をも

たなくなるような世界を待ち望むようになるかもしれない。人は、『自分の性的満足のためには、複数の女友達より妻の方が高くつくだろうか。それとも時々娼婦を買う方が安いだろうか』と考えるかもしれない。」(46 頁)これでは味気ない。

関係主義へ かくてガーゲンは関係主義を唱道する。そこで、「関係の中に存在しているということは、行為の莫大な可能性をストックしているということである。協応行為の流れの中で、行為の可能性は、予想もしなかったかたちで生じたり、縮小したり、拡大したりする。あらゆる関係は、現在作られつつある物語である。変幻自在的存在という視点は、関係の軌跡について考えるための舞台を用意してくれる。私たちの協応行為は、いかにして持続力をもつようになるのだろうか。何が安定の要因なのか。逆に衰退への落とし穴はどこにあるのか。これらの問題について、関係という視点から考えよう。」(175 頁)のである。他者との協調が深い絆へとつながっていくが(222 頁)、「絆への第一ステップは、共有された現実と、そうした現実に伴う心地よさや信頼性を共同で創り出すことである。」(224 頁)企業こそはそういう関係づくりを必須とする。「ビジネスは理性にもとづく議論を重んじ、激しい感情表現を軽蔑する。もう一方で、ビジネスはその組織に**献身する**メンバー、つまり組織の事を**気にかけて**、組織の成功のために**犠牲を払う**メンバーを必要とする。」(231 頁)だが気をつけなければならない。「いったん絆が結ばれると、個人主義の猛威が再び、しかもより激しい形で舞い戻ってくる。」(233 頁)すなわち、しばしば企業外部に対しては無責任になる(234 頁)。そして「集団間の敵意」(240 頁)が発生する。だから「集団間の対立を低減すること」(241 頁)が必要になる。そのためには対話が必要だという。それは企業に限らない。大学その他の組織においても同様である。教育(第8章)やセラピー(第9章)においても関係が重要だという。

企業組織 われわれにとっての関心事は企業組織においてはどうかということである。「第10章組織 — 不安定なバランス」、というところが参考になるだろう。いわく。「組織というものがつねに、コストと利益という観点から評価されてきたことを考えれば、仕事が

つまらない、意味がない、よそよそしい、といった要因はおよそ計算に入らない。そんなものは収支決算とは無縁である。しかしその一方で、そうした要因への配慮を怠れば組織が機能不全に陥る恐れがあることに、経験を積んだ管理職であれば誰でも気づいている。なんとか組織は回っていくかもしれないし、その効果はごく小さいものかもしれないが、長く続いていくかどうかは疑わしい。『何が組織に命を吹き込むのか』『組織に関わる人を元気づけ、深い関わりを生み出し、組織を最高の状態にするものは何か』は難しい問いである。」(381頁)

命はどうやって吹き込まれるのか、それは関係的な調整を通してであるという。すなわち「関係的な調整を通して、組織に生命が吹き込まれる。組織は、日常的な一群のやりとり — 褒める／批判する、情報を伝える／保持する、微笑む／しかめ面をする、尋ねる／答える、要求する／我慢する、管理する／承諾する — の中で、活気を得ることもあれば失うこともある。ある人の仕事に意味を与えているのは、その人個人ではなく、環境の力でもなく、この一群のやりとりに参加することなのである。」(383-384頁)

では、どうすれば人びとが元気づけられ、組織がよい状態になるのだろうか。それは、人びとが肯定され認められてこそだという。「肯定は、ただ微笑んだりうなずいたりすることから、他者の行動を言葉にして評価することまで、さまざまな形式をとる。」(385頁)「人は肯定されることで、アイデア、価値観、考え方を共有しようとするようになる。このようにして、組織の有する可能性はより豊かになり、その壁の外側にある意味のネットワークともより緊密に結びつくようになる。」(386頁)しかし、「関係を通して現実が共有され価値が生み出されると、それを確実に存続させようとする強い傾向が生まれる……。私たちは、それを『釘付け』にしたいと願ってしまう。……ところが、『結果を長続き』させようとするこの同じ力は、関係の活力を台無しにすること」(388頁)になってしまう。まさに、「組織の敵は組織」なのであり、「人々が集まってグループを作ると、それが大きいものであれ小さいものであれ、同時に部外者が作り出されることになる。」(390頁)「構造

的空隙の研究だけでは、私たちにとってまだ不十分である。開口部をもつことが重要なのは、『自分の組織』を強くするためだ、という前提が残っているからだ。関係的な視点によって、私たちの視野は広がる。一つの組織が幸福になることが大事なのではない。文化を、さらには、文化や領域を超えたグローバルな存在を守り活性化する、より大きな関係の流れこそが重要なのである。」(417頁)よくいわれるように、開かれた組織が必要なのである。

道徳・縁起 そして第4部は「道徳から聖なるものへ」となっており、「第11章 道徳 — 相対主義から関係規定的責任へ」、「第12章 聖なるものの探究」へと続いている。だが「西洋文化における道徳の単位は、基本的に個人である。こうして、道徳的価値づけの伝統は、『私はこちら側にいて、あなたはそちら側にいる』という分離の現実を作り出す。」(429頁)キリスト教で隣人を愛せよといわれているけれど「隣人を愛する物語は、関係についての物語ではなく、自分が英雄になる物語なのだ。」(430頁)

そうではなく「大きな社会制度を、人類としてのより広いコミュニティとの対話的關係にどのようにして引き込むか、その手段を生み出すことが重要な課題となる。」(446頁)対話が重要だという。そして、東洋的なものが称えられている。「ブッダの教え — すべてはつながりの中に存在する」(463頁)という項目が立てられている。そしていう。「仏教徒が**縁起**²⁾と呼ぶものについての意識、すべてが純粋に関連し合っているという感覚に入っていく。」(465頁)

1) 赤川学[2001]「言説分析と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房、64頁。

2) 「仏教は『縁起』ということを読みます。すべてのものは深く関わりあっており、単独で存在するものはない」という教えです
(<https://www.hongwanji.or.jp/mioshie/story/000762.html>)。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。
皆様のご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>)もご覧下さい。
フェイスブックもやっています。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。